

異文化コミュニケーション論の射程 ——あいさつに代えて——

古 田 暁

異文化コミュニケーション論との出会い

神田外語大学異文化コミュニケーション研究所は、神田外語大学設立の準備活動の基盤として東京の神田に開設されました。その後1987年の開学と同時に、現在の千葉県幕張の地に新たに移設されたのですが、文部省の薦めもあって、大学付置異文化コミュニケーション教育研究センターと当時は呼ばれました。その後現在の異文化コミュニケーション研究所と改称されますが、設立以来すでに13年が経ち、本年度をもって私も定年で大学を退職し、同時に本研究所を去ることになりました。つつがなく任務を終えることが出来ましたのも、関係者ご一同の厚いご支援と良きご指導のおかげと心から感謝しております。特に学長の石井米雄先生、独協大学の石井敏先生、本研究所の副所長久米昭元先生からは、身に余るお言葉を本号にちようだいたしましたことに、心からお礼を申します。

大学は異文化コミュニケーションをその開学の理念として準備、開設されたのですが、私自身は研究者として西欧の中世神学、哲学を専攻しておりましたし、今もしております。その私が専攻分野とは全く異なる異文化コミュニケーションという研究分野と関係を持ち、二足の草鞋を履くようになったのは、1980年から1981年にかけて国際基督教大学で東洋倫理の非常勤講師をしていたことに関連します。当時大学には Edward C. Stewart 教授がおられ、彼との出会いがこの分野との出会いともなりました。

異文化コミュニケーション研究は比較的新しい分野です。それまでも文化人類学、言語学、心理学などの分野で文化とコミュニケーションの諸関係が研究されておりましたが、アメリカ合衆国において1960年代にそれらは学際的研究分野として一つにまとめられました。前記大学では、齊

藤美津子先生の強力な指導の下にアメリカからこの新しい分野の専門家が招聘され、すでに J. Condon、Sheila Ramsey 両先生が教壇に立たれ、Stewart 先生は Ramsey 先生の後継者として来られていました。教授はこの分野の誕生の動きに参画したパイオニアの一人でした。教授と接触するうちに、この研究領域に私も関心を持ち、どっぷりと浸かることになったわけです。時代はアメリカではレーガン、フランスではミッテランが大統領になったばかりの頃でした。

その当時日本において異文化コミュニケーション研究と教育は上記の国際基督教大学を中心として、それと競うように西南学院大学では泉マサ子、大妻女子大学では石井敏、南山大学では岡部朗一、神戸市外国語大学では現在異文化コミュニケーション研究所副所長の久米昭元など諸先生が活躍されておりました。私もこれらの先生たちのご指導を受けながら、少しずつこの分野について知識を広げて行きました。

そのころ学会としては、現在日本コミュニケーション学会として知られる前太平洋コミュニケーション学会が、石井敏会長の下に活躍していました。SIETAR 日本支部はまだ SIETAR Japan と呼ばれ、現在のような研究者の会合という色彩は濃くありませんでした。現在高等教育機関には、コミュニケーションという名称の付いた学科、学部が多く見られますが、当時は皆無でした。神田外語大学設立に際して、文部省に国際コミュニケーション学部という名称で学部新設の申請を 1985 年にした際に、カタカナの学部、学科を文部省は未だ一度も認めたことはないと言われ申請受理を拒否されたものでした。当時はまだ異文化コミュニケーションの授業も、英語との関連で教えられていたのが一般の状況でしたが、現在ではこの分野の専攻大学院さえもあり、獨協大学、愛知淑徳大学などで開講しております。

研究機関として異文化コミュニケーション研究所は上記のように 1987 年に開設されましたが、1989 年には南山大学に岡部朗一教授指導の下にコミュニケーション研究者会議が活動を始めました。

こうして上記の諸先生、諸機関の関係者のご努力によって、研究と教育の両領域で現在の盛況が見られようになったことは実に嬉しい限りです。

一方この分野の開拓者であるアメリカの研究者、教育者で、特に日本からの留学生がその指導と多大の影響を受けた方々の間でも、D. Barnlund (SF Univ.) 先生は既に亡く、W. S. Howell, E. G. Bormann, E. C. Stewart, F. Cashmir 諸先生はすでに退職されましたが、J. Condon 先生が今もなお学部、大学院で教育に当たっておられるのは嬉しい限りです。

世界の激変とコミュニケーション状況

この二十年間に世界の状況は政治、経済、技術の分野で大きな変貌をみせました。この十年間でも、世界はそれ以前とは様相を全く変えてしまったとも言えます。その象徴が1989年のベルリンの壁の撤去です。同年アメリカではブッシュが大統領になり、90年末にはイギリスはメジャー政権に変わり、湾岸戦争が91年の初めに起こり、また同年ソ連邦が74年の歴史を終え解体します。東西世界を隔絶していたベルリンの壁が崩れたのは、東欧、ソビエトの国境を越える情報の流れの結果であったとも言われ、湾岸戦争は、第一次大戦の戦車の導入、第二次大戦の原子爆弾の開発に比すべき、インフォメーション・ウォーフェアの始まりであったとされています。こう見て来ると、この十年の世界に決定的変容をもたらしたのは情報の威力であったことが察せられます。このような状況下において、異文化コミュニケーション研究も、新しい時代に入ることを迫られていることは否定できません。

この十年は、情報の流れの促進が引き起こすグローバルゼーションに特徴づけられています。それを促進したまた象徴しているのが、コンピュータの出現と進化です。マーシャル・マクルーハンが全世界が一つの村 a global village であるとしたのは1970年代初期でした。彼が嘆いた視覚文化から断絶した活字文化から、視覚文化と融合可能な活字文化とも呼べるコンピュータの時代になり、さらにインターネットそしてEメールによって、世界は知覚的にそして知的にも、時間と場を超越して、村ならぬ、路地、裏通り a global alley に変化しつつあります。正に「メディアはメッセージ」であって、内容よりも媒体形式自体がこの事実を物語り、生ま

れようとしている新しい文化の将来を示唆しています。

コンピュータは、世界化の潮流を単に知覚的、知的世界に広げただけではありません。生活全般も変えようとしています。政治、経済、軍事全般は、今やその瞬時の計算能力とリアルタイムの情報伝達能力の支配下にあります。コンピュータなしでは、政治も、経済も語れなくなりました。その圧倒的な支配力のすごさは、湾岸戦争のみならず、昨年アジアで突如発生し、ロシア、南米へと広がった汎世界的な金融危機が、コンピュータを駆使した短期資金の移動に因るものであったことにもうかがわれます。

そしてこれらの動きの背後には、アメリカ・スタイルの資本主義、民主主義とその文化の世界的拡散があり、これらの動きの主要な推進役が、輸送手段、メディア、コンピュータの開発と爆発的な拡散であったことは間違いはありません。それらの力によって、それまでの国境、階層社会の枠組みを越えたネットワークが世界中に張り巡らされ、一瞬のうちに国境とか、一社会内のヒエラルキーを越えた人間の連携ができ、情報が自由に行き交う。今日私たちが立ち会っているのは、ヒエラルキー型の組織であった既存社会から、ネットワーク型の組織社会への移行の動きだと言えましょう。

再確認しなければならないのは、新しい情報機器の出現は一時的で表面的な現象ではないことです。私たちが知っている西欧世界は、一千年前に社会構造、価値観、生活様式の激変の結果として生まれたと言えますが、西欧は新しい一千年紀を迎える今日再び決定的に変わろうとしており、その余波が世界中に及びつつあります。そして一千年前の西欧世界の出現を促した主要原因の一つは、当時の国と教会の実務担当者間の密接な人間関係の結果として生まれた新しい情報の通路でしたが、今回も新しい情報機器の出現がもたらした情報通路の開拓が、世界をその基盤からその上に広げられる生活にいたるまで変えようとしているものと解釈できます。

このように新たに生まれつつある社会が欧米の経験、理念、技術を中心としたものであるのは事実ですが、世界が単純に欧米型文化に統一されるのではないことは、それに対抗して世界中で民族主義の運動が起こっていることでも明らかです。この歴史的動きは、いわば一国内における中央と

地方の対立と緊張に見られるように、より高次の総合へと向かうものと予想されます。今日多くの分野で叫ばれているグロー・カルな傾向は、異文化コミュニケーション研究においても十分注目すべきであるということを目指しておきたいです。

異文化コミュニケーション論の位置づけ

社会のこのように深刻な構造変化のさなかにあって、異文化コミュニケーション研究に従事する者がここで改めて問うことを求められているのは、異文化コミュニケーション論の研究対象は何かという基本課題ではないでしょうか。

そもそもコミュニケーションの視座が今日多くの学問に取り入れられつつあることは画期的なことで、それは19世紀末から今世紀初めにかけて、それまではアリストテレスの定義した学問観に従って学問とみなされていなかった「歴史」の観点が、全ての学問に不可欠なものとして取り入れられた事実に比すべきことと思われま

す。異文化コミュニケーション研究に限って言えば、歴史的に見て、それまで文化人類学などが個別文化の内的構造を研究してきたのに対して、複数文化の構成員間の相互作用を研究しようとした点で新しい分野を構成するに至ったと言えます。

しかし今や時代は、その社会構造から、価値観、生活様式に至るまで画期的に変わろうとしています。人間コミュニケーションの基本的変化によって引き起こされたこの変化は、自らをも変えようとしています。この四十年間で国境を越えた人間の交流は格段に増大し、特にこの十年間の社会の変化は居ながらにして一瞬のうちに世界と交流できるところまで来ています。古い、同じ問題が新たに問われねばならなくなった理由です。

異文化コミュニケーション論は分野か視点か、という課題は長年にわたり議論されてきました。社会の変化は、この古い問題に再び光を当てようとしています。異文化コミュニケーション論は非常に学際的で、特殊なコミュニケーション研究の一分野であるにしては、他の研究分野、特に他のコミュニケーション研究分野と重複するところが多いです。対人コミュニ

ケーション、集団コミュニケーション、ビジネスコミュニケーション、組織コミュニケーション、国際コミュニケーションのどれ一つとっても、文化そして他文化との関係を除外して論じることはできません。

異文化コミュニケーション研究は、その学際性からして、これらの他のコミュニケーション研究との共同作業であったのですが、あるいは異文化コミュニケーション論は、コミュニケーション研究の一分野というよりも、基本的にコミュニケーションと文化の関係の研究であり、ひいては各コミュニケーション研究分野の文化との関わりの基盤研究、あるいはコミュニケーション学概論たり得るのではないのでしょうか。

この問題の鍵は、文化そのものの概念規定にあるのかもしれませんが。世界の構造を基盤から再構築するような上記の変化が、文化そのものの理解の再検討を要求しているとも考えられます。そして文化と言うと、コミュニケーションが同時に問われねばなりません。

コミュニケーションは、人間生活にとって不可欠です。それは社会の紐帯であって、それなくしては人間社会も人間の生活自体も成り立ちません。そもそも人間世界は解釈を待つ自然科学の世界とは異なり、A. シュッツの言う間主観的世界で、常にその構成員によってすでに解釈され、理解された世界です。物事に対する特殊な理解、解釈、価値付け、対応の仕方が、それぞれの社会には常にすでに存在しています。それはコミュニケーションによって媒介されて存在する文化的社会です。これはギアーツの言うように、人間が意味論的存在だからです。そしてこれこそが文化と呼ばれるものではないのでしょうか。タイラー流の文化理解の代りに、ウェーバー、シュッツ、ギアーツの系列につながる文化観をもってしなければならぬのではないのでしょうか。

文化とコミュニケーションは同じではないが、不可分です。ですからどのような人間コミュニケーションも、文化の影響から逃がられません。普遍的な文化が概念的に矛盾をはらむ限り、普遍的コミュニケーションは不可能で、オリエンタリズム現象にもその例が見られます。すべてのコミュニケーションは、複数の個人あるいは個人からなる集団が共通の場に立とうとする、普遍への努力の一表現でしかないのです。しかもこの目標に

達する手段としてコミュニケーションは微弱ですが、それ以外の手段を人間は持ちあわせておりません。そこで人は、いとも自然にコミュニケーション行為によって自閉的、独我論的状况からオープンな対話的世界へと橋を渡そうとするのです。

というわけで文化・際的 inter-cultural なコミュニケーション研究は、コミュニケーション研究の一下部組織どころか、コミュニケーションとは何かを問うコミュニケーション概論、コミュニケーション論そのものだと言えるのではないのでしょうか。文化とコミュニケーションの関係を理解することは、全てのコミュニケーション研究にとって、特に現在のように情報機器と情報システムの開発が世界化現象とともに加速化される時代には、それらの後を常に追いかけるような状況から逃れるためにも必須のことです。つまり異文化コミュニケーション研究の射程は一般に考えられるよりも長いと言えましょう。

参考文献

- Dervin, B., Grossberg, L., O'Keefe B. J., & Wartella, E., (Eds.). (1989). *Rethinking Communication*, vol. 1, Paradigm Issues, Sage.
- Geertz, C., (1973). *The Interpretation of Cultures: Selected Essays*. Basic Books.
- Geertz, C., (1988). *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. Stanford University Press.
- McLuhan, M., (1962). *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. University of Toronto Press. (森 常治訳『ゲーテンベルグの銀河系 活字人間の形成』みすず書房、1986年)
- Ong, W. J., (1982). *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. Methuen. (桜井直文、林 正寛、糟屋啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年)
- 田中 宏・大石 裕編『政治・社会理論のフロンティア』慶應義塾大学法学部政治学科開設百年記念出版(慶應義塾大学出版会、1998年)
- Schutz, A., (1970). *On Phenomenology and Social Relations*. ed. H. R. Wagner, The University of Chicago Press.